新　春高怪物列伝　高校新記録との戦い　４　　４７秒台の時代へ

１９８７年の北海道インターハイで春高は鳥海が４００ｍＨで６位に入り、１６００ｍＲも準決勝まで進んだ。
その時のアンカーは森丘でも鳥海でもなく、２年生の塩川茂樹であった。
森丘に「なんで２年生がアンカーなの？」と聞くと、「一番強いからです」という・・・

★無尽蔵のスタミナ
春高初の４９秒台という金字塔を打ち立てた奥谷さん（３０回）にせよ、塩川にせよ、仲間内から語り継がれるのはけた違いの「スタミナ」である。
圧倒的な練習量をこなし、それに比例して記録も伸びていく。とくにロングスプリントを得意とする。まあ４００ｍで日に３本、リレーも含めて３日で９レースくらいこなせるのだから常識的な体力ではないことがわかる。
しかも疲れ切ったはずの一番最後のレースが決勝。そこで自己記録を出すのだ・・・。

★最強のライバルたち
北海道インターハイ４００ｍを制したのは奈良添上の２年生山本厚選手。なんと伊東浩司（報徳学園）を置き去りにする快走だった。他には苅部俊二選手や舘　義和選手という全日本チームへ進んでいく強豪がそろっていた。中でも山本選手に肉薄したのは３位の長身の渡辺高博選手（新居浜東）で、同じ２年生。準決勝までに１１人が４７秒台という層の厚さを誇った。これは２５年前のレースである。

４７秒６１で山本選手が強風の中、優勝したが、秋の国体は伊東浩司選手が４６秒台で雪辱した。しかも夏のインターハイと全く同じ８人が走った。

当然翌年の神戸インターハイでは好記録が期待された。
山本選手には１６００ｍＲの優勝と総合優勝もかかっている。
４００ｍの優勝は山本選手か渡辺選手か？
記録はでるのか？・・・

★神戸ユニバスタジアムの奇跡

周囲の期待を上回る過熱したレースになった。
塩川も関東で４８秒３０と右肩上がり。山本選手は３レーン、渡辺選手は４レーン、塩川５レーンであった。
スタート早々に渡辺、山本が猛ダッシュ。
高校生の４００ｍのペースではなかった。２００ｍの通過は２２秒を切るほどだったという。この二人に翻弄され、みなペースをかき乱された。
追っていったインコースの選手は、オーバーペースでバテて自滅。
結局この二人が最後まで競り合い、先制パンチが功を奏し渡辺選手がゴール。
速報は４６秒３７！！の超高校新記録であった！

▲41回大会（1988年）男子400mで，前年３位の渡辺高博（新居浜東）が46秒37の超高校新（日本歴代５位）をマークした

最初から高校記録狙いのハイペースに周囲は荒れた。逃げ切り勝ちの渡辺、追い切れなかった山本。ゼッケン 356 が食らいついた春高・塩川茂樹。

１、渡辺高博　４６秒３７（高校新記録・日本歴代５位）
２、山本厚　　４６秒９７
３、塩川茂樹　４７秒６４

４６秒台２人、そして８位でも４７秒９２という高校史上最速のレースとなった。

この記録は高校生の４００ｍの意識を大きく変えることになる。
通常４７秒中盤で優勝していたこの種目も、４６秒台優勝を徐々に見るようになり、ついに１９９６年の為末大選手、２００５年の金丸選手らの大記録へと続いていくことになったのだと思う。
塩川が競ったこの歴史的なレース。
１９８８年神戸インターハイの４００ｍ伝説こそが、高校陸上界に大きな衝撃を与え、その後の大きなレベルアップに貢献したことは言うまでもないだろう。

塩川の怪物ぶりは、ほかにもある。
休日はトライアスロン、スーパーアスロンへ参加し、競技を続けている。上尾競技場や、春高で会っても「あれ？神奈川から塩川は車で来たの？」と聞くと、「ハハハハ、練習のため自転車で来ました」という。
数学、物理が好きで珠算は段位を持つ。秀才というよりコンピューターのような天才。本当に電卓より計算が速かった。練習と、勉強が好き。睡眠時間は極めて短い。それが普通のスタイル。礼儀正しく、人にやさしい。慶応大学競走部主将の重積を務めた。ミュージシャンではない。

新　春高怪物列伝　　続く